

朝日ジャーナル

ASAHI JOURNAL (W)

Paris Biennale

'77. 5. 6

A

文化ジャーナル



美術

マタラツツオの死とビエンナール

第一四回展を迎える今年のサンパウロ・ビエンナールは、今秋一〇月一日から一二月一八日まで開催されることに決定したが、先週号のこのコラムでも触れられていたように、今回から国別展示を廃止し、「現代の提言」、「アンソロジック的展示」、「偉大なる対決」の三部門に分け、部門別展示という方式を打ち出した。ベネチア、バリの両ビエンナールがいろいろに手直ししてきたのに対し、授賞制度を含めて組織形態を変えてこなかったサンパウロ・ビエンナールだけに、大変貌である。もっとも、この新方式がどういう結果になるかは、幕を開けての話であらう。

ところで、今秋の開幕を前にして、このビエンナールの絵の実力者ともいえるべき人物が去る一六日に世を去ったことが報じられた。フランシスコ・マタラツツオがその人である。サンパウロ・ビエンナールは一九五一年に始められたが、マタラツツオは創設以来のこのビエンナールの大スポンサーであり、いわば生みの親であり育ての親ともみられてきた人物である。当初はヨーロッパ、アメリカの現代美術をブラジルに紹介することが主たる意図だったようだが、二回展から今回もなお継続している授賞制度が設立された。この大賞の資金(二万二五〇〇)を提供してきたのもマタラツツオ財団だ。ビエンナールは、国、州、市も加わった「サンパウロ・ビエンナール財団」によって運営されているが、その主力はマタラツツオの資力であり、彼は没するまでこの財団の会長の位置にあった。ブラジル有数の財閥の主として、ビエンナールを左右するワンマンなどという陰口も聞かれたらしいが、国際展といいたいものは移ろいゆくものに資金を提供し、サンパウロ・ビエンナールを支えてきた功績はきわめて大きいというべきであらう。

ビエンナールは今日、その組織上の問題を種々かかえていて、今回のサンパウロ・ビエンナールの新方式もそのひとつのあらわれだが、もうひとつの大問題は経済的なものである。パリ・ビエンナールの予算の少なさは驚くべきもののようだが、サンパウロはその点が強かった。マタラツツオ没してビエンナールがどうこうなるとは思われないが、その死の影響は皆無とはいえないだろう。

(立林)